
イノセント・アライブ ～命の選択と荒ぶる息吹～

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセント・アライブ 命の選択と荒ぶる息吹

【Nコード】

N0153Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

提示された選択肢に、息吹は首をかしげる。

とりあえず立ち止まってみた。するとすぐ目の前に、大きな毛虫が落ちてきたではないか！

息吹には、選択肢が視える。

母親からあらゆることを選択するようしつけられ、いつしか選択肢が視えるようになっていた。

その母親は亡くなってしまったが、今の息吹は母親の友人だった小百合のもとで生活している。

息吹は親友のゆりかごとともに、小百合が学園長を務める、お嬢様学校と名高い藤星女学園に通っている。

そんなある日、息吹は近所の男子校に通う優季にひと目惚れする。ゆりかごに後押しされ知り合いにはなったふたりは、徐々に仲を深めていくのだが――。

「息吹ちゃん、どっちにする？」

お母さんがわたしをじっと見つめながら、両手に持ったお皿の上のケーキを交互に目の前へと掲げ、そう質問してくる。

いつもそうだった。

べつに怒ったり急かしたりするわけではない。

ただひたすら、わたしに選択させるのだ。

「うーんとねえ……、えーつとねえ……」

お母さんの右手のお皿には、生クリームの白とイチゴの赤が絶妙なコントラストを奏でる、ケーキのお姫様、ショートケーキが乗せられていた。

そして左手のお皿には、白いドレスに身を包みしっとりとした雰囲気漂わせる、ケーキのお嬢様、レアチーズケーキが乗せられている。

わたしは小さい頃からケーキには目がないのだけど、その中でもショートケーキとレアチーズケーキは大大好物だった。

「はう、どっちも、たべたいよお……」

流れ出るヨダレを拭うことすら忘れ、わたしのキラキラした瞳はふたつのお皿の上を行ったり来たり。

目だけじゃなく頭も左右に大きく揺り動かし、ツインテールの髪を振り乱しながら、ふたつのケーキの姿を変わりばんこに視界いっぱいに映していた。

「うふふ、ダメよ、息吹ちゃん。ちゃんと決めないと」

笑顔のままではあったけど、言うことを聞かないと怖い、って思いは幼心にもあって。

「えっと、その、こつち！」

わたしはお母さんが右手に持つショートケーキを指差す。

「はい、どうぞ」

答えを聞いたお母さんは満足そうに微笑み、右手のお皿をわたしの目の前に置いてくれた。

もうひとつのお皿は、お母さんの目の前に。

「わーい、いただきまーす」

フォークを持ち、目の前のショートケーキに、わたしは手を伸ばす。

ぴたっ。

そこで、手は止まった。

視線の先には、チーズケーキを口に運ぶお母さんの姿。

フォークからお母さんの口の中へと滑り込んでいくレアチーズケーキの欠片を、わたしはただ黙って眺めていた。

「……………」

「あら？ 息吹ちゃん、どうしたの？」

「……………ん、と……………」

やっぱり、レアチーズケーキのほうがよかったかな。
わたしは口に出して言うことができなかった。

「ううん、なんでもない」

小さく答えたわたしは、ショートケーキをフォークで小さめに切る。そして、そのひと切れを覚束ない手つきでフォークに乗せ、自分の小さな口へと運んだ。
甘くて美味しい。

でも……。

レアチーズケーキのほうが食べたかったかも、という思いでいっぱいになっていたわたしの口に広がる甘さには、なんとなくほろ苦さも混じっているように感じられてならなかった。

「息吹ちゃん、美味しい？」

「……………うん」

お母さんの問いかけに答えるわたしには、愛想よく笑顔を浮かべる余裕なんて、残っているはずもなかった。

「おはようございます、息吹さん」

「あつ、おはよう、ゆりかごさん」

わたしが住宅街の真ただ中にある曲がり角まで差しかかると、いつものように制服姿の女の子から声がかけられた。

彼女は華美月ゆりかごさん。はなみつき

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園に通う彼女は、毎日この曲がり角の隅に立って、わたしを待っていてくれる。

もちろんこのわたし、神奈息吹も、れっきとした藤星女学園の生徒だ。

藤星女学園では、下の名前にさんづけで呼ぶのが通例となっているので、わたしたちもお互いにそう呼び合っている。

どんなに仲よしの相手でも、呼び捨てにしたりはせず、名前にさんづけで呼ぶ。それが学園のルール。

べつに規則になっているわけではないけど、学園の雰囲気もあってか、そのルールは堅実に守られているようだ。

「それでは、参りましょうか」

「ええ」

ゆりかごさんは優しげな笑みをたたえながら、ゆったりとした動作でくると百八十度回転して歩き始めた。

制服のスカートがふわりと微かに舞うことすら、優雅さを演出してくれているかのよう。

ウェーブがかった彼女の長い髪も風に揺れ、全身でひとつの芸術

作品みたいに思える。

この制服を着ているだけでお嬢様とささやかれるくらい有名な学校だから、わたしなんかだと登校時にも周囲の目が気になってしまっただけだ。

そんな視線を受けてもまったく気にする様子もなく、ゆったりと歩くゆりかごさん。

彼女は完璧に、お嬢様だった。

それに比べてわたしは――。

「……どうかなさいました？」

「……いえ、なにも……」

ゆりかごさんがそつと見つめてくれる中、わたしはただうつむいて答えるだけ。

今でこそ少しはマシになってきているものの、わたしは昔から気が弱くて、人と話すのが大の苦手だった。

声が小さいのも、自分に自信がないことから来ているように思う。それに決断力も弱いため、なにをするにしてもなかなか決められなくて、優柔不断と言われてしまう場合も多い。

ゆりかごさんは、そんなわたしに愛想を尽かすことなく、中等部の頃から一緒にいてくれる大切な友人だ。親友と言ってもいい関係だろう。

彼女と出会ったのは、中等部に上がった初日。

新しい学校の新しい教室に入る決意がなかなかできず、ドアを前にしておどしているときだった。

彼女はいきなりわたしの手をぎゅっと握って、一緒に教室へと入ってくれた。

あのときの手の温もりは、今でも忘れられない。

それから丸三年とちょっと。

わたしはその頃とあまり変わっていないけど。

ゆりかごさんはいつでも、わたしのすぐそばで微笑んでくれていた。

「そうですか。それでは今日も一日、頑張りましょうね」

「……うん」

優しく包み込んでくれる彼女の横に並んで歩きながら、わたしは控えめに頷く。

わたしはただうつむいて歩くだけの状態だったのだけど、

「藤星女学園の生徒さんたちよ」

「やっぱり優雅ね」

ゴミ出しをしに来たらしいおばさんふたりが、ひそひそと話すそんな声が聞こえてきた。

……わたしは、全然優雅なんかじゃないのに……。

沈んでいるわたしのそばにいるとき、ゆりかごさんはいつだって、余計なことなんか言わずに寄り添ってくれていた。

そんなわたしだけど、実はちょっと変わった能力を持っていたりする。

「桜……もうすっかり散ってしまいましたわね」

「うん、そうね」

校内をゆっくりと散策するわたしとゆりかごさん。
といっても、お昼休みや放課後ではない。

今は一時間目と二時間目の合間にある休み時間。

藤星女学園では、移動教室の場合でもゆったりと慌てず騒がず歩いていけるよう、休み時間が長くなっている。

その分、午後の授業が終わる時間は遅くなってしまうのだけど。

ともかく、そんなゆったりとした時間経過の中で、藤星の学園生活は成り立っていた。

現に今だって、とくに移動教室というわけでもないのに、ゆりかごさんとふたりでお散歩しているわけだし。

学園の敷地はかなりの広さがあって、毎時間歩いていても飽きることはない。

……っていうのはさすがに大げさかもしれないけど。

藤星女学園は、初等部から高等部までがひとつの敷地内にあり、さらには藤星女子大もすぐ隣に並んで存在している。

女子大の敷地自体は一応、高等部までとは分かれていて、両校のあいだには高い壁が立ちはだかっているのだけ。

実際には何ヶ所かある通用門からお互いに行き来することが可能で、警備の人にチェックされたりするわけでもないから、ほとんど

同じ敷地内と言ってしまったていくらいだった。

わたしもゆりかごさんも、たまに大学の食堂まで行ってお昼ご飯を食べたりするし。

もつとも藤星女学園も女子大のほうも、不審者が敷地内に入らないよう、正門と裏門は厳重に警備されている。

だからこそわたしたちは、こんなにもゆったりとした学園生活を送ることができているのだろう。

——と、不意に。

微かな風が、ツインテールにまとめているわたしの髪の毛を揺らす。

そしてそれと同時に、わたしの頭の中に浮かび上がってくるものがあった。

『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

浮かび上がってくる「もの」というより、「文字」と言ったほうがいいのかもしれない。

正確にはなんとなく、そんなふうに感じるだけではあるのだけど。

「息吹さん？」

すぐ右横に並んで歩いていたゆりかごさんは、わたしの表情がいきなり硬くなったのを感じたのか、首をかしげながらのぞき込んでいる。

わたしは優柔不断な自分の脳みそにムチ打って、瞬時に判断を下す。

今の今まで、こうやってこの桜並木の下を歩いてきているのだから、「そのまま進む」なんて、わざわざ改まって決断するようなことでもないはず。

ということは――。

×『そのまま進む』

○『一旦、立ち止まる』

わたしはピタリと、その場に立ち止まった。

「あら？ どうなさいました？」

もちろん、一緒に歩いていたゆりかごさんも、首をかしげたまま立ち止まる。

次の瞬間。

ぽとり――。

上のほうから――正確にはおそらく、桜の木の枝が葉っぱから、とっても大きくてなんだか鮮やかな色合いをした物体が、わたしたちふたりのすぐ手前の地面に落っこちてきた。

なんとそれは、大きな毛虫だった。

そのあとは、ちょっと大変だった。

毛虫に驚いたわたしたちが泣き喚き叫び騒いだから……ではない。いや、実際のところ、わたしはそれくらいの勢いだったのだけど。

「あら、毛虫ですわね。可愛いですわ」

とかなんとか言っただと思っただら、ゆりかごさんはそつとしゃがみ込んで、事もあるうに細くて白い可憐な指先を、極彩色のまがまがしい毛虫へと伸ばし始めた。

「や、ちよつと、ゆりかごさん、ダメだよっ！」

慌ててわたしは手を伸ばし、うねうねうごめく毛虫まで数センチくらいにまで迫っていたゆりかごさんの手をぎゅっとつかむ。

だって、いくら本人が可愛いって言っているけど、毛虫なんだよ？ 種類にもよるかもしれないけど、毛虫の毛って毒があるのもいるみたいだし……。

それに、毛のように見えても、ちよつと硬くてトゲのようになっている種類もあるらしいから、もし毒がなかったとしても、指に刺さってケガをしちゃうかもしれない。

とっても綺麗で透き通るように真っ白なゆりかごさんの指に、血の赤なんて似合わないよ。

それにゆりかごさんってば、普段から頻繁にスキンシップしてくるっていうか、わたしの手を握ったり首筋とかを触ってきたり、そんなことも多いわけだし。

毛虫なんかをつかんだ手で触られたりしたら、いくら親友とも言うべきゆりかごさんであっても、ちよつと嫌だ。

……こつちの理由のほうが強かったのかもしれないけど。

ともかくわたしは、ゆりかごさんの手をぎゅつと握って、彼女の瞳を見つめていた。

「あらあら、息吹さん。今日はとっても積極的ですね」

「いや、えっと、頬を赤らめて、そんなこと言わないで……」

わたしのほうも反射的に真っ赤になりながら、ゆりかごさんの手を離す。

「ふふふ、冗談ですわよ」

ほんとだろうか。

わたしは友達関係四年目になる今でもまだ、ゆりかごさんって人がよくわからないままだったりする。

ただ、彼女の行動のおかげで、毛虫に驚いたわたしが泣き喚き叫び騒いだりするようないままでのなかったのだから、ここは感謝しておくべきなのだろうとは思っただけ。

ところで、さっきの「あれ」は、わたしが持つ能力。

頭の中に「そのまま進む」「一旦、立ち止まる」という文字が浮かんだ、あれだ。

なんだか知らないけど、不意に選択肢が「見える」ことが、わたしにはある。

いつ、どういう場合に視えるのか、自分でもわからない。

この能力がテストの問題とかにでも有効だったら、まあ、なんて素晴らしい能力なんだろう、と感動ものだったりするのだけど。そういう場合に選択肢が視えたことは、残念ながら一度もない。

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園や隣の藤星女子大は、それなりに学力レベルも高い学校ではある。

ただ、基本的にエスカレーター式だから、本人が望みさえすれば進学できないなんてことはほとんどない。

もちろん面接を受ける必要はあるし、藤星女子大への進学の場合にはテストを受ける必要もある。大学は一般入試も実施していて、敷地も別だからだろうか。

それでも一般入試とは分けられているため推薦枠扱いとなり、落ちることは稀らしい。

そんな環境だからか、この学園の生徒たちはみんな、通常、とても伸びりとした雰囲気の中で過ごしている。

もつとも、中間テストや期末テストがある以上、順位づけされるのは仕方がないようで、総合順位は掲示板に貼り出されてしまうのだけど。最低限の競争意欲は持たせようということだろうか。

そしてわたしの成績はどの程度なのかといえば、お恥ずかしながら、下から数えてほとんどすぐ、というくらい。

ありていに言って、おバカさんなのである。

トップクラスの成績を誇るゆりかごさんに教えてもらったりしながら頑張っているのに、どうしてなのかなあ。

はあ……。せっかくの能力も、上手に活かせなきや無意味だよね……。

と、そのとき。

また微かな風が吹き抜けていった。

『急ぐ』

『諦める』

……え？ なに？

またしても選択肢が視えたというのに、わたしにはまったく意味がわからなかった。

次の瞬間――。

予鈴のチャイムが高らかに響き渡った。

藤星文学園では、休み時間が長めに設けられているからか、授業開始三分前になると予鈴が鳴ることになっているのだけど。

「あら、ちょっとここからでは、教室まで遠いですわね」

そう、いつもなら戻る時間を考えながらお散歩しているのに、今日は毛虫の一件があったせいで、ついつい教室から遠い場所に立ち止まってしまっていたのだ。

とすると、おのずと答えは決まってくる。

○『急ぐ』

×『諦める』

「急ぎましょう、ゆりかごさん」

「ええ、もちろんですわ」

わたしの提案に、ゆりかごさんも頷く。

とはいえ、慌ただしく走ったりなんかしない。

お嬢様学校である藤星の敷地内で、スカートを振り乱しながら走ることはタブーとされているからだ。

もちろん、遅刻したら先生に怒られてしまうわけだけど。

でも、廊下を走って怒られることのほうが、この学園ではよっぽど恥ずかしい事態なのだ。

「息吹さん、ちょっとよろしいかしら？」

次の休み時間になった途端、クラスメイトの静香^{しずか}さんがわたしに話しかけてきた。

いつもどおりお散歩に出かけようと、わたしの席にゆったりと歩み寄ってきていたゆりかごさんよりも、さらに早く。

「はい、なんででしょう？」

「占いをしていただきたいのでしょうか？」

わたしの質問に答えたのは、静香さんではなくゆりかごさんだった。

どういうわけだか、少々不満顔なのが気にかかるところだけだ。

「はい、そうなんですの。お願いできますかしら？」

微かに首をかしげながら控えめにお願ひしてくる彼女に、わたしは否と答えることなんてできはしなかった。

「……ええ、いいですよ」

ちょっとだけゆりかごさんの顔色をうかがいつつ、わたしは静香さんの申し出を受け入れた。

わたしには選択肢が視えるという能力がある。

だけどわたしは、他の人にそのことを話したりはしていない。

ゆりかごさんにだけは話してあるけど、彼女もそれを言いふらし

たりなんて絶対にしない。

もちろん、いつでも好きなときに選択肢が視えてくれるわけではないし、それ以前に選択肢が視えるのって、わたし自身に関わるような決断を迫られるときばかりのように思う。

だから仮に能力のことを話していたとしても、それで占いや予言ができるわけじゃない。

とはいえ、勘が鋭いだけなのかそれともやっぱり能力が影響しているのか、わたしの占いは当たると評判だった。

普段の他愛ない会話の中で、ふと「息吹さんはどう思います?」なんて尋ねられた場合に、わたしの言ったとおりにしたら上手かった、ということが何度もあったからだ。

実際のところ、尋ねられたわたしのほうも、ただなんとなく思ったことを素直に答えたただだし、百発百中ってわけでもないから、能力とは全然関係ないと思う。

ただの偶然。

それでも、なにかにすがりたい、という気持ちもわからなくはない。

だからわたしは、占いをお願いされたら快く引き受けるようにしていた。

占いを聞いた人も絶対ではないというのはわかってきているから、もし言われたとおりに行動して失敗しても、文句を言ってきたりなんかはしない。

しいて文句を言うとするれば、わたしとのお散歩時間を減らされたゆりかごさんくらいだろうか……。

でもそんな彼女だって、わたしが占いを通じてクラスメイトとお話している姿を黙って見つめながら、ほのかな笑みを浮かべている

のだから、咎める気なんてないはずだ。

「それじゃあ、伺います。なにを占えばいいのでしょうか？」

「はい。今週末、伯母様のお屋敷でパーティが開かれるのですけれど、着ていくドレスが決まらなくて困っておりますの。どちらがいか、占っていただきたいのですが」

「ふむふむ」

わたしは静香さんが取り出した二枚の写真を眺める。

真っ赤な薔薇をイメージさせる明るい色合いのドレスと、淡い紫色で落ち着いた印象を与える大人っぽいドレス。

どちらも高価そうだ。

だけどこれって、わたしに聞くような内容でもない気がする。

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園に通っているとはいえ、わたし自身は全然お嬢様じゃないのだから。

こんなドレスなんて、もちろんお目にかかったことすらない。

「う、うゝん……」

さすがに頭を悩ませているわたしに、ゆりかごさんからひと言。

「そんなに凝視しても、息吹さんには品質のよさだとか色合いのセンスだとかなんて、わかるはずないでしょう？　いつものように、ビビッときたほうを選べばいいのですわ」

なんだかちよつと失礼かも、と思わなくもなかったけど、それは今さら気にすることでもない。ゆりかごさんからの扱いって、普段からこんな感じだし。

でも、彼女の意見はもつともだ。

そう考えたわたしは一度目をつぶり、軽く深呼吸をしてから、新たな気持ちで二枚の写真を見直してみる。

……あつ、なんか、こっちのほうが好きかも。

なんと適当な理由だろうか。自分でもそう思っけど。その直感を信じて、わたしは紫色のドレスの写真を指差した。

「えっと、こっちが、いいかな……」

「そうですよね、わたくしもそう思っていましたの！」

わたしの答えを聞いた静香さんは、両手を組み合わせながら、ぱーっと明るい笑顔を振りまく。

……そう思ってたなら、わざわざ訊かなくてもいいのに……。

と文句のひとつも言っただけでやりたい気分ではあったけど、他の人の意見も聞いておきたいっていうのは、誰しもが考えることだろう。全然占いなんて呼べないと思うものの、わたしの占いは、意外と的確なアドバイスをしてもらえると評判らしいし。

意外と、っていうのが、ちょっと引くかかるところではあるなとか。

わたしなんかの意見で物事を決めちゃって、本当にいいのかなとか。

思うところは多々あるけど、わたしの言葉を聞いて喜んでくれる顔を見ると、こっちまで嬉しくなってくる。

「息吹さん、ありがとうございました。またなにかあったら、お願いしますわね！」

「ええ。パーティ、楽しんできてくださいね」

笑顔を残して去っていく静香さんの姿を見送るわたし。
そのすぐ横には、ゆりかごさん。

「ふふふ、息吹さん、相変わらず頼られておりますわね。毎週何人かは、必ず占いをお願いしてきますものね」

「あ……えっと、ごめんなさい、ゆりかごさん。お散歩に行けなくなってしまうて……」

なんとなく責められているように感じたわたしは、素直に謝罪の言葉を述べる。

「いえいえ、気になさなくていいですわ。息吹さん、占いをして
いるとき、とてもいい顔をなさってますもの。見ていだけで、わ
たくしも幸せな気持ちを分けてもらえますのよ」

「ゆりかごさん……」

温かな彼女の言葉に、わたしの心の中も温まっていくなを感じた
……。のけど。

「それに、占いをしている息吹さんは集中しておりますから、わた
くしも楽しませていただきましたわ」

「……え？」

「ふふふ、やっぱり気づいておりませんでしたのね？ 占いをして
いるあいだ、サラサラの髪の毛を撫でさせてもらったり、ぷにぷに
の二の腕を触らせてもらったりしておりましたのよ？」

「ふえ？」

「それに……、制服の中にそっと手を入れて、お胸のほうにまで
……」

「えええええ～～～！？」

突然のわたしの大声で、教室にいる人たちが一斉に視線を向けてくる。

「あの、えつと、ごめんなさい、なんでもありません。みなさん、お気になさらないください!」

慌てて言い訳をするわたしに、ゆりかごさんは口に手を当ててコ
ロコロとした笑い声を響かせる。

「ふふふ。冗談に決まっていますじゃないですか。目の前には、静香さんがいたんですのよ？　そこまでしたら、静香さんだつてなにごともなく占いを聞いているはずがないでしょう？　だいたいこのわたくしが、そんなことをするとお思いですか？」

悪びれた様子もなく言い放つゆりかごさんに、わたしは、

……してもおかしくないと思うてるから、あんな大声出しちゃったんだよ。

なんて、もちろん口に出して言うことはできなかった。

「今日は暖かいですね〜」

「そうだね〜」

わたしとゆりかごさんは、ゆったりと学園の敷地内を歩いていた。お散歩ではなく、お昼ご飯を食べに行くところだ。軽く汗ばむくらいの陽気の中、爽やかなそよ風がわたしたちを優しく包み込んでくれる。

「今日は、どこへ行きますようか？」

「う〜ん、そうね〜……」

と、そこでいつもの選択肢が、頭の中に浮かんできた。

『レストラン』

『カフェ』

『大学の敷地内へ』

『学園の外へ』

藤星女学園の敷地内にはレストランとカフェがあるし、大学のほうにも同じようにレストランとカフェがある。

さらには学校の周辺にもオシャレなお店なんかが多く存在しているから、毎度毎度、迷ってしまうのだ。

なお、お弁当を持ってくる人も多いけど、わたしもゆりかごさんも、普段からお弁当持参ではなかった。

ゆりかごさんの家はお金持ちだから、毎日ちよつと高めのレストランで食べても大丈夫なくらいの昼食代を用意してもらっているらしい。

一方のわたしは、彼女の家ほど余裕があるわけではないという立場上あまり迷惑をかけるわけにもいかず、贅沢はできない身分。お弁当を作ってもらうのも大変だから、お小遣いをやりくりして昼食代に充てているのが現状だ。

もちろん昼食代はもらっているのだけど、最低限必要な金額つてのをしっかりと把握しているため、あまり多くはもらえない。

ただ、ゆりかごさんも一緒に食べるわけだから、わたしにつき合わせて毎日一番安いカフェで食べるのも悪いだろう。

だからこそ、お小遣いからも昼食代を捻出することになるのだけど。

とはいえ、べつにダイエットしているわけではないものの、わたしもゆりかごさんも基本的に少食。

軽い食事で済ませても全然問題なかった。
というわけで、

× 『レストラン』

○ 『カフェ』

× 『大学の敷地内へ』

× 『学園の外へ』

「今日はまた、カフェにしない？」

「ええ、いいですよ」

わたしの決断に、ゆりかごさんも素直に頷いてくれた。

選択肢が視えるというのは、わたしにとって、ものすごく助かる能力ではある。

昔から優柔不断で、決断したあとでもうじうじと悩んでしまいがちな性格だから。

でも選択肢が視えたときって、どうしてもその視えた選択肢に縛られてしまい、他の解決策を考える余裕がなくなってしまうといった弊害もあるのだけだ。

わたしたちはカフェへと入り、サンドイッチセットを注文した。

サンドイッチと飲み物とデザートとのセット。

量は少なめだけど、サンドイッチの中身を豊富な種類から好きなように選べるため、人気のメニューだったりする。

タマゴは外せないとして、ツナやハムといった定番もあれば、サラダ系の軽いものやカツやコロツケなどのボリューム満天なものもある。フルーツ入りホイップクリームなんかも人気で、わたしもお気に入りだった。

中身としてタマゴ、ポテトサラダ、フルーツホイップをわたしが選ぶと、ゆりかごさんも同じものを選び、席に着く。

向かい合わせの席に座ったわたしたちが、お喋りしながらの軽い昼食に舌鼓を打っていた、そのとき。

不意にカフェの外が騒がしくなった。

「あら？ どうしたのでしょうか？」

窓から外に目を移すと、女子生徒たちが一定の方向を指差して、普段はあまり出さないような大きな声を上げていた。

「レストランが火事ですわっ！」

「まあ、大変。怖いですわねえ」

いまいち緊迫感が足りないお嬢様たちの声に、わたしたちも視線をさらに移動させると、確かにレストランの方向からだろうか、もくもくと煙が立ち昇っているのが見えた。

どうやら火はすでに消し止められたあとで、とくに被害も出てはいないみたいだけど。

わたしは、ほっと胸を撫で下ろす。

……レストランに行つてなくて、よかった。

そんなわたしの感想とは裏腹に、ゆりかごさんときたら、

「あら、レストランのほうに行っておけばよかったですわね」

なんて野次馬根性丸出しでばやいていた。

それだけじゃなくて、

「ふう……。息吹さんの決断って、やっぱり微妙ですわよね」

なんて、ため息をつきながら、わたしに非難がましい視線まで向けてくる。

ちょっと、ひどいよね？

さつきまではゆりかごさんだって、ここのサンドイッチセットはやっぱり格別ですわ、とか言って満足そうにしていたのに。

だけどわたしは、

「あははは……。ごめんね、ご期待に添えられなくて……」

と、沈みがちなつぶやきを返すことしかできなかった。

「それでは、戻りましょうか」

「ええ……」

サンドイッチセットを食べ終えて、ゆっくりとくつろいだあと、わたしたちはカフェを出た。

そして教室へと戻る帰り道のこと。

『右』

『左』

突然の選択肢。

……なによ、これ？ どういうこと？

よくわからず、呆然としてしまつわたしの頭の中に、さらなるイメージが重なる。

5、4、3……

数字が視え、それと同時に、カッチ、コッチと、時を刻むような音が……。

……え？ これって……、もしかしてカウントダウン！？
と……とりあえず、決めなきゃ！
わたしは深く考えず、即座に決断した。

○ 『右』

× 『左』

素早くわたしは右側に飛び退く。

すぐ右横を歩いていたらゆりかごさんに、思いっきり抱きつくような形になってしまったけど……。

と、その直後、わたしが歩いていた場所のすぐ左側辺りになにかが落ちてきて、地面に白いシミを作る。

それは、鳥のフンだった。

あ……危なかったー！

安堵の息をつくわたし。……だったのだけど。

「あらあら、息吹さん。大胆ですわね」

ぼっ、と頬を赤らめながらそんなことを言っているゆりかごさん

の瞳は、わたしのすぐ目の前にあって。

「あつ、わわわ、ごめんなさい！ でも、そういうのじゃないから……」

慌てて離れるわたしに、

「ふふふ、そういうのって、どういふのですかしら？」

なんて、ゆりかごさんは意地悪な笑みを向けてくるのだった。

下校時刻、辺りはすっかり黄昏色に包まれていた。

授業の開始時間が少し遅めで、休み時間も長めに取ってある藤星女学園は、帰る頃にはもうすっかり夕方だ。

日が長い夏の時期ならそうでもないけど、冬だと薄暗くなっているくらい。

だからなのか、部活動なんかは自由参加となっていて、どの部活にも所属していない人は結構多い。

わたしもゆりかごさんも、そんな中のひとりだった。

だいたい部活をしてから帰ると、辺りは真っ暗になってしまっわけだし。

学園の敷地内にある寮で生活している生徒以外には、なかなか難しいところだろう。なにせみんな、お嬢様ばかりなのだから。

もっとも、お迎えが来てくれるような家の人なら、問題ないのかもしれないけど。

「それにしても、夕方ともなると少々涼しくなってきましたわね」

「うん、そうだね」

ゆりかごさんの言葉を肯定しながらも、わたしはその涼しさをほとんど感じることなく歩いていた。

すぐ横で、ゆりかごさんが寄り添うように歩いていたからだ。

彼女はわたしの右手をぎゅっと握りながら、ボリウームのある髪の毛もろとも、頭をわたしの肩に乗せている。

それにしても、こんなにぴったりと寄り添って歩くなんて。

ゆりかごさんって、いつもこんな感じなんだよね。
必要以上にべたべたくつついてきたり、手を握ってきたり……。

なんというか……。

そっちの趣味があるんじゃないかって思うくらい。

というか、周りの人たちから見たら、わたしもそういう趣味の子
だって思われちゃうんじゃない……。

そう考えてはいるのだけど、ゆりかごさんは親友だし、わたしは
拒否することなんてできないでいた。

……べつに嫌ってわけでもないしね。温かいし、いい香りがする
し……。

って、なにを考えてるのよ、わたしは！

おかしい考えに至ってしまい、それを焦って振り払おうとするわ
たしは、きつと顔を真っ赤にしていたことだろう。

夕陽の赤さが、隠してくれるといいな……。

「あら、どうかなさいました？」

「うつん、なんでもない……」

すぐ右の耳もとから聞こえるゆりかごさんの声に、わたしは余計
に頬が赤くなっていくのを感じ、左側に顔をそむけてうつむきなが
ら小さく答えることしかできなかった。

……恥ずかしいし、早く帰りたいな。

とは思っものの、ゆりかごさんはいつもどおり、ゆったりゆっく
り歩く。

わたしとふたりきりの時間を噛みしめるように……。

実際、わたしの住む家は学園からそれほど遠くない。

待ち合わせ場所にしている曲がり角まで、あと少し。もう視界に入るところまで来ていた。

そこからゆりかごさんは、毎日ひとりで歩いて帰っていく。

曲がり角からゆりかごさんの家までは、結構な距離がある。

だからわたしは、一緒に彼女の家まで行ってもいいと提案してみたことがあるのだけど。

「そのあと息吹さんがひとりで帰ることを考えたら、わたくし、不安で仕方がなくなってしまいますわ」

ゆりかごさんはそう言って、きっぱりと断った。

「それに、短いからこそ、ふたりきりの濃密な時間が味わえるというのも、あると思いますわよ？」

さらにつけ加えられた言葉に、わたしはちよつと首をひねったものだけ。

こういう発言を聞いていると、ゆりかごさんってやっぱり、そっちの趣味がありそう、って思えてしまう。

ただ、彼女はわたしをからかって面白がっているような様子もあるから、確信を得るには至っていない。

だけど、どっちだって関係ないのかもしれない。

ゆりかごさんが大切な親友だというのは、疑いようのない事実なのだから。

と、唐突に――。

『このまま帰る』

『ちよっと立ち止まってみる』

いつもの選択肢。

ん〜……っとなん？

思わずわたしは、足を止めていた。

足を止めたということは、つまり立ち止まったということ。

「あっ！」

っと思ったときにはもう遅く。

×『このまま帰る』

○『ちよっと立ち止まってみる』

選択肢は、すでに選ばれてしまっていた。

「どうなさいましたの？」

寄り添っていたゆりかごさんも当然ながら一緒に立ち止まり、わたしの顔をのぞき込む。

「うっん、なんでもない」

そう答えながらも、わたしの足は止まったままだった。

それからすぐのことだった。ざわざわとした幾人かの声が、夕陽に染められた一角にこだまし始めたのは。

高校生と思われる男子生徒の集団が、曲がり角の向こうから現れたのだ。

どうやらそれは、近くにあるはるさめ春雨高校という男子校の生徒たちのようだった。

藤星女学園の指定通学路は、狭い道がほとんどなく、学校から近い道にはPTAの人が立つてくれている。もちろん、登下校時の安全を守るためだ。

そのせいか、春雨高校の生徒は、あえてこの道を外して登下校する人も多いらしい。

もともと藤星女学園が授業の開始時間と終了時間をずらしているのも、安全性を高めるためだと言われているから、藤星の生徒以外と出くわすことすら稀なだけだ。

そうは言っても、当然ながら藤星女学園専用の道路ってわけではないし、他の学校の生徒や近所の方々が通る場合だってある。

だからべつに、それは驚くべきことではなかった。

ただ、どうしても身構えてしまう。

小さい頃からずっと女子校生活だったわたしやゆりかごさんにとって、男性というのは、未知の生物みたいなものだから……。

それに、今日はなにかの行事でもあったのか、一度にたくさんの男子生徒たちが、この道を通っていった。

こんなにたくさんの男性がいる道を、平然と通ることなんてでき

ないよ……。

きつとさっきの選択肢は、このことを警告してくれたのだ。

あのとき立ち止まっていなかったら、ちょうど曲がり角に差しかったところで、大勢の男性の集団に紛れ込んでしまふところだったから……。

でも、そのわたしの考えは間違っていたというのを、このあとすぐに知ることとなる。

「ふふふ、やっぱり息吹さん、殿方は苦手ですね」

なんだか嬉しそうに、ゆりかごさんがつぶやく。

「……ほつといてよ。だいたい、ゆりかごさんだって、ずっと女子校なんだから同じでしょう？」

「ふふふ、そうでしたわね」

それでは、そろそろ行きましょうか。

わたしの言葉をさらりとかわすと、ゆりかごさんはすでに男子生徒たちが通り抜けた道へと、ゆったりとしたいつもの動作で歩き始めた。

もちろん、わたしの右手をぎゅっと握りながら。

と、そのとき、

「はうっ！」

ビビビッ！

わたしの体中に、あたかも電気が流れたかのような衝撃が走った。反射的に再び立ち止まるわたし。

ピンッと、つかんだままだったゆりかごさんの左手が伸びる。

「あら？　息吹さん、どうしましたの？」

「……………」

わたしは、ひと言も答えることができなかった。

でも、視線は如実に答えを語ってしまっていて。

わたしがじつと見つめるその視線の先をたどるゆりかごさんは、にまっと、笑った。

「あらあらまあまあ、息吹さん、そうなんですのね」

「あ……あの、えっと……」

どう答えていいものやら、さっぱり言葉にできず、どもりまくっているわたしに、彼女はズバツと解答を示す。

「あの殿方に、ひと目惚れしてしまいましたのね？」

耳もとに唇を寄せて、心底楽しそうな好奇の瞳を向けながら、ゆりかごさんはささやいた。

そう、わたしの視線の先には、ゆつくりと歩く、ひとりの男子生徒がいたのだ。

さつき通りかかった男子生徒たちの集団と同じブレザーの制服に身を包んでいるから、同じように春雨高校の生徒だろう。

ちよつとつつむき加減でゆつくりと歩くその人は、さつきの集団とは違って、ひとりで歩いているようだった。

ただなんとなく、その横顔が、わたしの心にビビビッと刺激を与えて……。

だけど……。

「いや、あの、その、ち、違っのっ……！　そそそそ、そんなじゃ、なくて……！」

「そんなじゃなくて、なんなんですか？」

「えっと、だから、ほら……！　え……」

「ほらほら、なんなんですか？　言ってみなさいな」
「いや、だからね……」

もごもごと口を動かすものの、言いたいことを上手く言葉にできないわたし。

「だから、なんですか？　もついいではないですか。隠さなくてよろしいですよ？　認めてしまいなさいな」

「いや、その、違うの、ただ……」

「ただ……？」

わたしはそつと、さっきの人の横顔を思い出す。
その横顔はまるで――。

「そう、ただちょっとだけ、お父さんに似てたから……。だから……！」

真っ赤になりながら、必死の抵抗を試みる。

でも、案の定というか、ゆりかごさんはより面白がってこんなことを言い出す始末。

「あらあら、息吹さんったら、お父さまラブでしたのね」

「あのねえ……、そういうのじゃないから……」

「ですが……」

つい今しがたまでちよつといやらしい笑みを浮かべていた彼女の顔が、ふつ……と、陰る。

「それも、仕方ありませんわよね……」

「……………」

ゆりかごさんのつぶやきに、わたしは言葉を返すことができなくなっていました。

べつに、気にしているわけじゃなかった……はずなのに……。

わたしたちふたりが立ち止まったまま、こんなやり取りをしているあいだに、くだんの男子生徒はとくに歩き去ってしまったようだ。もうどこにも、その姿を見つけることはできない。

しばらくのあいだ、わたしたちは徐々に薄暗くなっていく夕焼け色の中、ただ黙って立ち尽くしていた。

「……明日は少し早めに、この待ち合わせ場所へ来るようにしてみましようか」

ゆりかごさんはわたしの顔色をうかがいつつ、ゆったりとした口調で喋り始めた。

黙ったまま、わたしは頷く。

「ここがあので殿方の通学路みたいですから、待ち合わせしながら通りかかるのを待っていれば、きっとまた出会えますわ」

「……うん……」

ゆりかごさんの気遣いを受け、わたしもできる限りの笑顔を返すと、ついさっきあの人を見かけた曲がり角で手を振り合い、お互いの家へと向かって歩き始めた。

「ママ、だ〜いすき〜！」

「うふふ、ありがとう息吹ちゃん！」

これは、いつ頃のことだっただろうか。

よくは覚えていないけど、お母さんに素直な言葉を叫ぶわたし。

この日は家族三人水入らず。お父さんもわたしたちと一緒に一家団らんのひとときを楽しんでいた。

「むっ、パパのことは嫌いなのか？」

「ううん、パパも、だ〜いすき〜！」

ちよつといじけ気味に不満をつぶやくお父さんにも、素直な思いを伝える。

「はっはっは！ 息吹〜！ パパも大好きだぞ〜！」

「きやははは！ パパ、おヒゲがくすぐったい〜！」

お父さんはわたしを抱き上げて、ヒゲの生えた頬をすりすりと寄せる。

幸せな、家庭の記憶。

いつまでも壊れることなく、永遠に続くと思われて疑わなかった日々。

だけど、平穏な日常というものは、とっても簡単に崩れ去ってしまふもの。

このときのわたしにはもちろん、そんなことが想像できるはずもなかった――。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

わたしが玄関のドアを開けるとすぐに、お手伝いの弥生ちよひさんが出迎えてくれた。

高級住宅街に建つ、この家。

庭も建物も広いことと、両親ともに忙しいことから、お手伝いさんを雇って家事全般をお願いしている。

「お荷物、お持ちしましょうか？」

「いえ、いいですよ。弥生さん、疲れてるでしょ？ 自分で運びます」

「お仕事ですから、ご遠慮なさらなくてもいいのに」

わたしが彼女の申し出を断ると、そう言って笑う。

弥生さんは四十代くらいの女性で、ちょっとふくよかなところが、なんだか安らぎを与えてくれる。

三人目のお母さんと呼んでもいいと思っているくらいの人。

「いつもお疲れ様です。それでは」

「お食事の準備も、じきに終わりますので、できましたらお呼びします」

「はい、お願いします」

わたしは弥生さんに軽く会釈を残し、階段を上って自分の部屋へと向かった。

高級住宅街に建てられ、お手伝いさんまでいるこの家。

この家……なんて微妙な表現をしていることから察してもらえ
かもしれないけど、わたしは正確にはこの家の子じゃない。

実際には、養子ということになっているわけだから、今はわたし
の家と言ってしまったていいのかもしれないけど。

だけど、どうしてもすべてを受け入れる気にはまだはなれなかった。

小学校二年生だった当時、わたしは両親を一度に亡くしてしまっ
た。交通事故だった。

その後、残されたひとりっ子のわたしを引き取ってくれたのが、
本当のお母さんと学生時代からの親友だったという、ふじほしきさめい藤星小百合さ
んだ。

小百合さんの家にはもとよく遊びに来ていて、両親が事故に
遭ったときも、わたしは旅行に出かける両親の邪魔にならないよう、
この家に預けられていた。

わたしは小百合さんの住むこの家に養子として迎えられることにな
った。

すべてを受け入れる気にはまだはなれなかった、とは言ったけど。

小百合さんはわたしを本当の娘のように可愛がってくれているし、
そのことをわたしは心から感謝している。

でも、どうしても本当の両親の記憶がちらついてしまうのだ。

ところで、藤星という名字からも想像がつくかもしれないけど、
小百合さんの家は藤星女学園を創立した家系にあたる。正確に言え
ば、小百合さんの旦那さんである幸人さんゆきひとの家系が、ということに
なるわけだけど。

小百合さんは、わたしやゆりかごさんが通う高等部の学園長を務
めている。そして幸人さんは、藤星女学園および藤星女子大学全体

の理事長という立場にある人だ。

高等部以外の学園長や、理事のメンバーも、小百合さんや幸人さんの親戚の方々が担っているらしい。

そうすると、相当なお金持ちっぽく思えるけど、実はそうでもない。

お手伝いさんを雇ってはいるものの、それは小百合さんも幸人さんも忙しくて、どうしても家事ができないからで、仕方なくといった感じのようだし。

それに、弥生さんは小百合さんの知人が経営する家政婦派遣会社の人だから、かなり格安で契約させてもらっているのだとか。

もちろん貧乏ってことはないけど、それでも余裕はあまりない。だからこそ、わたしは昼食代をなるべく節約するようにしているのだ。

そうそう、わたしが小百合さんの家に養子として迎えてもらっているのは、今話したとおり。

だから当然のごとく、戸籍上の名前は藤星息吹となっているわけだけ。

でも、学校では神奈息吹と、本当の両親の名字を名乗らせてもらっている。

それは小百合さんが、この家の子になったことを受け入れられずにいるわたしを気遣ってくれたからだ。

小百合さんには悪いなと思っているのだけど、わたしにとって神奈は両親の思い出がたくさん詰まった特別な名字。だから、その気遣いがとても嬉しかった。

「ふう……」

部屋に入ったわたしは、カバンを勉強机の横に置いて、ベッドに腰かける。

いつもならすぐに制服を脱いで部屋着に着替えるところだけど、今日のわたしは、なんだかぼーっとしてしまっていた。

さつき見かけてビビッときた、「あの人」のことが気にかかっていたからだ。

ゆりかごさんにも話したとおり、お父さんに似ているから、こんなにも気になるのかな……。

お父さん……わたしが小学校二年生のときに死んでしまった、本当のお父さん……。

とっても優しくて温かい、太陽のような笑顔が、鮮明な記憶として残っている。

まだ幼かった頃の記憶までしかないから、それほどはっきりと脳裏に思い浮かべられるわけじゃない。

小百合さんから写真を見せてもらったことはあるから、そのイメージと重ね合わせているのだと思う。

わたしが両親を亡くしていることは、ゆりかごさんには話してある。

だからわたしが、「お父さんに似てた」と言ったとき、彼女の表情が陰ったのだろう。

彼女とは中等部で初めて同じクラスになってからのつき合いだけ

ど、お互いに心を許し合っていて、今ではもう、なんでも話せる間柄になっている。

だからこそ、わたしは親友と考えているわけだし、きっとゆりかごさんも同じように思ってくれているはずだ。

もしかしたらそれ以上に思っていたりして、なんて考えてしまうこともあるけど……。

でもさっき、わたしが「あの人」を気にかけているのを応援してくれているような、温かな笑顔と言葉を向けてくれた。

明日は少し早めに起きて、気合い入れて髪の毛をセットしなきゃ。本当に会えるかどうかはわからないけど、それでもなんだか、とってもドキドキして、とってもワクワクして、考えただけで顔が熱くなってくる。

こんな気持ち、初めてだなあ……。

なんか、いいかも。

わたしは自然とにやけてしまっていた真っ赤な顔を枕に押しつけて、足をバタバタさせながら必死に恥ずかしさを紛らわせていた。

コンコン、ガチャッ。

「お嬢様、お夕食ができました。……おや？　どうなさったのですか？」

夕食の準備ができたことを伝えに来た弥生さんに、その様子を思いつき見られてしまって、さらに顔を真っ赤にする羽目になってしまったのだけだ。

「はっ、なんでもないです！　もう、弥生さんったら、ノックをしてから入ってくるまでの時間が短すぎます！」

わたしは弥生さんを押しつけるように部屋を飛び出すと、階段をトタトタと駆け下りてダイニングルームへと向かうのだった。

食卓のテーブルの上では、すでに並べられた料理たちが美味しうに湯気を立ち昇らせていた。

目玉焼きが乗せられた熱々のハンバーグには、ポテトと甘く煮たニンジン、コーンが添えられている。ライスはレストランのように平べったいお皿に乗せられ、その隣からはコーンスープが香ばしい匂いを漂わせていた。

小さめのガラスの小皿にはサラダが盛りつけられ、さらにはワイングラスまで置かれている。当然ながらわたしには、ワインではなくジュースが用意されているわけだけど。

相変わらず弥生さんの料理の腕は素晴らしい。

わたしはゆったりと席に着く。

すぐ手もとには、ナイフとフォークとスプ用の丸いスプーンとといった食器類が、紙ナプキンの上に整然と並べられていた。

テーブル全体を改めて眺め直し、思わず感嘆の吐息と一緒に、ヨダレまでもが漏れてしまいそうだった。

食卓に着いているのは、わたしと小百合さんのふたりだけ。幸人さんはどうやら、今日もまだ帰ってきていないようだ。

これらの料理を作った張本人である弥生さんは、わたしたちと一緒に食事をするのではない。

わたしたちが食べ終えたあと、いつもひとりで食べている彼女と一緒に食べましょうよ、と誘ってみたこともあるのだけど、それはできませんと断られてしまった。家政婦としてのこだわりなのかもしれない。

両手を合わせ、いただきますと声を揃えると、わたしと小百合さんの夕食のひとときが始まった。

わたしはナイフとフォークを手に取り、真っ先にハンバーグへと狙いを定める。

なにを隠そう、ハンバーグはわたしの大好物なのだ。

「あら、息吹ちゃん、なにかいいことでもあったの？」

柔らかくてジューシーなハンバーグを頬張るわたしに、小百合さんがそう言って話しかけてきた。

え？ どうしてそう思うの？

と一瞬考えたけど、どうやらそんなの一目瞭然なほど、わたしの頬は緩みきっていたみたいだった。

さっき自分の部屋で弥生さんに見られてしまったにやけ顔と同じ、いや、きつとそれ以上に、にたあゝと笑顔がこぼれ落ちていたに違いない。

わたしが大好きなハンバーグを目の前にして喜んでいる、という考えを飛び越して、小百合さんは「いいことがあったのでは？」と判断した。

そのことから考えれば、相当だらしなく、にへらゝと笑っていただろうという推論が自然と成り立つ。

普通に考えたら、すごく恥ずかしい状態。

でも、そんなことも気にならないほど、わたしはなんだか嬉しくて楽しくて仕方がなかったのだ。

とはいえ、それを言葉して伝えられるほど、自分自身の気持ちを理解できていなかったというのもあり、わたしはなるべく澄ました

顔で、こう答えた。

「いえ、とくになにもありませんよ、小百合さん」

小百合さん――。

戸籍上では、今はもう、わたしの母親ということになる彼女。

でも、わたしは「お母さん」と呼ぶことができないでいた。

同じように、幸人さんのことも、「お父さん」と呼べないままだ。

それを、小百合さんも幸人さんも咎めたりはしない。

幸人さんは多忙で家にいないことが多いから、あまり顔を合わせないけど、小百合さんとは毎日こうやって食事をとにもする。

弥生さんが作った食事を美味しくいただきながら、いろいろとお喋りをする。

小百合さんはいつも、優しい微笑みをたたえながら、わたしを包み込んでくれる。

それでもわたしは、どうしても「お母さん」と呼べない。

小百合さんは優しくて温かくて大好きだけど、どうしてもダメなのだ。

そんな小百合さん。

わたしがとぼけているのは、どうやらお見通しのようだった。

「ふふっ、息吹ちゃん、……恋……してるわねえ？」

ぶっっ！

思わず口に含んでいたコーンスープを吹き出してしまふ。

「あらあら、息吹ちゃん、大丈夫？」

「奥様、これを」

「あら弥生さん、ありがとう」

すかさず弥生さんがフキンを持ってくる。

……って、弥生さん、隠れて見てたの！？

もしかしたらそのうち、サスペンスドラマ『家政婦に見られた！』みたいな状況になったりとか……。

と、そんな失礼なことを考えている場合じゃないよね。

「ごめんなさい、わたし……」

「いいのいいの。ちよつと意地悪しちゃったみたいで、ごめんなさいね」

小百合さんは笑顔を絶やさないままテーブルを拭きながらも、さらに意地悪な質問を続けてくる。

「それで、お相手はどんな方なの？」

「べ……べつに、お相手とか、そんなんじゃないですけど……」

わたしは、少し恥ずかしかったけど、覚悟を決めて正直に話すことにした。

「えーっと、近くの男子校の生徒です。帰り道で見かけて、なんかこう、ビビビツときたっていうか……」

あの人の面影を思い出して顔を真っ赤にしながら話すわたしに、小百合さんは、

「ふふっ、息吹ちゃんったら、青春してるのねえ」

と微笑んだ。

慌てて弁解するわたしだったけど。

「いえ、べつに、そういうのでは……」

ない……わけじゃないよね……。

そう考えてしまい、無意識に言葉は途切れ、うつむいたまま頭から湯気を昇らせ続ける結果となってしまった。

ドキドキしてなかなか寝つけなかったものの、わたしはいつの間にか眠ってしまっていたらしい。

気づけばカーテンを通り抜けて、朝の清々しい光が差し込んできていた。

目覚まし時計を見ると、七時を少し回ったところ。

藤星女学園は授業の開始時間が遅いから、普段起きるのは八時くらいだ。

だからまだ、目覚まし時計が鳴る前の時刻。

ちょっと睡眠時間が足りないのか、頭がぼーっとしている感じを受ける。再び布団に入れば瞬殺で二度寝が成功、結果ゆりかごさんに文句を言われる羽目になってしまうだろう。

とりあえず目覚まし時計のタイマーを切り、ゆったりとした動作で着替える。

余裕のある時間だから、制服も乱れることなくビシッと着ることができた。

普段どおりだとあまり時間がないから、胸のリボンが曲がっていることも多くて、ゆりかごさんに「リボンが曲がっていてよ？」なんて言われながら直されたなんて経験も、一度や二度ではなかったりする。

そんなときは、「お姉様、ありがとうございます」とお礼を述べなければいけないのだとか。同い年なのに、どうしてお姉様なのだろう……？

と、それはともかく。

「うん、こんなもんかな」

わざわざ声に出して着替えの終了を宣言したわたしは、素早くカバンをつかんで部屋を出る。

そして階段を下り、玄関脇にカバンをそつと置くと、そのまま洗面所へと向かった。

部屋にある小さな鏡じゃ、制服をしつかり着ることができているか正確にはわからない。その確認のためもあるけど、それよりも髪の毛のセッティングが一番の目的だ。

寝相が悪いのか、というわけだかわたしの髪の毛は、朝起きると大爆発していることが多い。それを無理矢理どうにかするため、頭の両側で結んで押さえることができる髪形にしている、というものもあるわけだし。

ともかく、念入りに髪をとかしてからまとめ、綺麗なツインテールを形作る。

うん、完璧！

昨日のうちに弥生さんに話して、早めに朝食を作ってもらうこともお願い済みだ。

弥生さんは泊り込みでお手伝いをしているわけではなく、平日の朝、うちに出勤してきて、夜は夕飯の洗い物とお風呂の準備が終わった時点で帰っていく。

ちなみに、土日と祝日には基本的に弥生さんは来ない。それでも平日はかなり長い勤務時間となるわけだから、大変だなと思う。それがわかっているというのに、わたしは弥生さんに無理を言つて、朝食を早く作ってもらうなんてお願いをしてしまったのだけだ。

「おはようございます、お嬢様」

「おはようございます、弥生さん。すみません、無理を言ってしまった」

「いえいえ、いいんですよ。冷めないうちに、食べてくださいね。あつ、でも、急ぎすぎないでくださいましね？ のどに詰まっちゃったら大変ですから」

「もう、そんなこと、言われなくてもわかってます。わたし、そんなに子供じゃないんですから」

「ふふふ、そうですね、失礼しました。ささ、とにかく食べてくださいまし。腹が減っては戦ができぬ、ですわよ」

「戦って……、そんなじゃないですから。それでは、いただきます」

こんな他愛ないお喋りも、朝の心地よさを演出してくれる。いつもより早い時間だから、さすがに小百合さんはまだ起きていない。

弥生さんが食事中もずっとそばにいてくれたのは、わたしがひとりでは寂しく思つかもしれないから、だったのかな。

とにかくわたしは食事を終え、洗面所に戻り歯磨きをすると、玄関脇に置いてあったカバンを勢いよくつかむ。

そして、

「行ってきますー！」

「行つてらっしゃいませ」

弥生さんが大きく頭を下げて送り出してくれる中、意気揚々と玄関を飛び出した。

待ち合わせ場所である曲がり角に着くと、そこにはすでにゆりか
ごさんが立っていた。

「おはようございます、息吹さん」

「おはよう、ゆりかごさん」

朝の挨拶を交わし合い、普段だったらそのまま一緒に学園へと向
かって歩き出すところだけど……。

ゆりかごさんはそつとわたしの耳もとに唇を寄せ、小さくささや
いた。

「さて、それではここでしばらく立ち話でもしながら、昨日の殿方
が通りかかるのを待ちましょう」

「で……でも、不審に思われたりしないかな？」

対するわたしも、同じように小声で質問を返す。

「大丈夫だと思いますわよ？」

ゆりかごさんは澄まし顔でそう答えてくれたけど、どうやらわた
しの顔には不安がありありと浮かび上がっていたようで。

「ですが心配なようでしたら、そうですね……お友達を待ってい
るように装っておきましょうか」

言うが早いのか、彼女は素早くわたしの耳もとから離れると、言葉

どおりの演技を始めた。

「もう、なにをやっているんでしょうか。由梨絵さん、遅いですわね？」

わたしの肩に手を置き、爪先立ちで曲がり角の先をのぞき込みながら、ゆりかごさんがわざとらしい口調で問いかけてくる。

「あ……う、うん、そそそ、そうねっ！ほんと、おおおお、遅すぎです、わよ」

それに答えるわたしは、焦りまくりどもりまくり、声も裏返って不自然さ丸出しだった。

「ふふふ、息吹さん、演劇には向いていないみたいですね」
「……ほっというて……」

ぼそつと耳もとに投げかけられたゆりかごさんの言葉に、わたしは力なくぼやくことしかできなかった。

ちなみにゆりかごさんがとっさに出してきた由梨絵さんっていうのは、クラスメイトの名前だったりする。

彼女の家は学校を挟んでわたしやゆりかごさんの家とは反対方向なので、偶然鉢合わせするなんてことは、まずないだろう。

由梨絵さん、勝手に名前を使ってしまって、ごめんなさい……。

「あ……来ましたわ……！」

不意に、ゆりかごさんがわたしの肩に乗せた手に力を込め、そうつぶやいた。

わたしも、彼女と同じ方向に視線を向ける。
そこには、昨日のあの人がいた。

早すぎず遅すぎず、ゆっくりとした動作で、今わたしたちが立っている曲がり角に向かって歩いてくる。

見れば見るほど、心がぼわんと温かくなる感じ。

やっぱり、お父さんに似てるな……。

そんなことを考えながら、ぼーっとしているわたしの耳もとで、ゆりかごさんがそそのかす。

「さ、話しかけなさいな」

「え……？ むむむむ、無理よぉ……」

彼女の声に、わたしはぼそぼそと答えるのみ。

そりゃあ、お話したいのは山々だけど。なんて言って話しかければいいっていうの？

そんなわたしたちの様子に気づいているのかいないのか、あの人は曲がり角を通過し、そのまま春雨高校のあるほうへと歩き去っていく。

わたしはその人の姿にちらちらと視線を向けながら、ただ黙って見送ることしかできなかった。

「ふう……」

あの人の姿が見えなくなると、ゆりかごさんのため息が聞こえた。

「まったく、臆病さんなんですから」

「ただただ、だって、しょうがないじゃない。いきなり話しかける

なんて、できないよ」

涙目になって訴えかけるわたしに、ゆりかごさんは優しく微笑んでくれた。

「そうですわね。なにかきっかけを作らなくてはいいけませんわね」

ニヤリ。

なんとなく、優しいだけの微笑みじゃなかったように思えたのは、はたして気のせいだっただろうか。

「まずは意識していただくことが先決ですわ」

春雨高校へと向かう人通りも少なくなると、時間差で藤星女学園の生徒の数が増えてくる。

あの人が去ったあと、ゆったりと歩き出したゆりかごさんは、その隣に並んで歩くわたしにそう言った。

そしてそう言いながら、ぎゅっとわたしの左手を握る。

わたしを、勇気づけてくれているのだ。

だからきつと、他意はない……、はず……。

……そのわりに、なんだか指を絡めてきたりしてるんだけど……。

そ、それはともかくっ！

今は彼女の言葉に耳を傾ける。

「あの場所を通ることは確認できましたから、作戦は立てやすくなりましたわ。明日からも今日と同じ時間で待ち合わせして、同じように立ち話をし続けましょう。そしてあの殿方が通りかかったら、なるべく大きめの声でお喋りするんですわ」

「うん……うん……」

「少しでも注目していただいて、印象づけていきましょう。そうですわ、息吹さんの名前もお呼びしますわね。そうすればきつと、あの子、息吹っていう名前なんだ、と意識してもらえはらずですわ」

「うん……うん……」

ひとりで盛り上がっているゆりかごさんの声とは対照的に、わたしの声は沈み気味だった。

べつに、嫌なわけではないのだけど。

やっぱり恥ずかしいから……。

そう言つと、ゆりかごさんはつないでいる手の力をぐっと強めた。

「もう、そんなことでどうするんですか。息吹さん、あなたがしっかり頑張らなくてはいいけませんのよ?」

「う、うん、そうだけど……」

「まったく……そうやってはつきりしないようでしたら、わたくしがあの殿方にアタックしてしまいますわよ?」

「え、や、そ、それはダメっ!」

思わず大声で叫んでしまい、近くを歩いていた藤星女学園の女生徒たちがなにごとかと振り返つて、わたしに目を向けてくる。

「は、はう……」

真っ赤になつてうつむいているわたしの隣では、ゆりかごさんがコロコロと小気味のよい笑い声を漏らしていた。

「ふふふ、冗談ですわよ。応援しておりますわ。ね?」

「……うん」

恥ずかしがりながらも答えるわたしの声を聞いて、ゆりかごさんは満足そうに頷いた。

「由梨絵さん、今日も遅いですわね」。昨日あれだけ念を押しまし

たのに」

「そそそそ、そう、ですね」

次の日の朝も、わたしとゆりかごさんは、待ち合わせ場所の曲がり角で、白々しくも演技をしていた。

「あつ、息吹さん、あちらをご覧くださいませ」

「え？ ゆりかごさん、なんですか？」

ゆりかごさんが一方を指差すと、わたしもそちらへと目を向ける。彼女の指先を視線でたどっていくと、そこには、あの人が……。でも、ゆりかごさんが指差していたのは、その人ではなく、さらに向こう側。ここから微かに見える国道だった。

「今、道路を戦車が通っておりましてわ！」

……そ、それはあまりにも不自然じゃない！？

と思わなくもなかったけど、彼女は彼女なりに、わたしのために考えて言ってくれたはずだ。

わたしがあの人のほうをじっと見つめていても、不自然じゃないように。

……話題自体の不自然さは、この際気にしない、ってことなんだろうな……。

「え、えええ？ うそ、ほんとあ？」

会話内容だけじゃなくて、わたしの喋り方も、やっぱり不自然ではあったけど。

ともかくわたしは、ゆりかごさんの指差すほうに目を向けた。

自然とあの人を、視界内に捉える。
思わず、見つめてしまう。

あの人、顔を上げた。

はうつ……！

目が……合っちゃった！

ボツ！

真っ赤になって反射的にうつむいてしまっわたし。

「ああ、もう……」

ゆりかごさんが小さく舌打ちする音が聞こえた。

ちよつとはしたないよ、ゆりかごさん……。

なんてツツコミを入れられるわけもなく。

結局わたしは今日も、ただ黙ってあの人が過ぎ去っていくのを見送ることしかできなかった。

「ダメじゃないですか、息吹さん。あの場合、微笑んで頷き合っべきでしょう？」

「そ、そんなこと言っただって……」

「それに、息吹さんの名前を記憶していただきたいというのに、わたくしの名前まで呼んでしまったては、台無しではありませんか」

「うつて、ごめんなさい……」

ゆりかごさんからそんなダメ出しを受けてしまっわたしだった。

そしてまた次の日も作戦は続く。

「今日は、遅いですわね」

「そうだね。お休みなのかな？」

曲がり角で待っているわたしたちのそばを、いつもならあの人がもう通り過ぎているはずの時間。でもこの日は、まだ通っていないかった。

諦めかけたそのとき、待ち焦がれるあの人は、やっぱりゆっくりとした動作で歩いてきた。

わたしたちの学校は授業の開始時間が少し遅いからいいけど、あの人の通う春雨高校は、この時間だと遅刻ぎりぎりなんじゃ……。そんなわたしの心配を肯定するかのように、急ぎ足の男子生徒があの人の中から迫ってくる。

「おい、ゆうき！ そんなトロトロ歩いてると遅刻するぞ！」

「うん、そうだね」

そうだね、と言いながらも、あの人は歩く速度を変える気配がない。

「ま、オレは先に行くけどな！」

「あははは、薄情だなあ」

といった会話を残し、走り去る男子生徒。もちろん、あの人の背中も遠ざかっていく。

「あの人、ゆうきくん、っていうんだ……」

なんだか心がほわ〜んと温まったような感じで、わたしはただただぼーっと、ゆうきくんの去っていった道を眺め続ける。

その横では、ゆりかごさんがニヤニヤと笑っていた。

「ふふふ、お名前ゲットですわね。おめでとうございます」

「うん……でも、どんな字なのかな〜」

「ふふふ、名字もわかっておりませんし、まだまだ先は長いですよ？」

「うん、わかってる……」

などと、あの人の名前を知ることができた喜びを噛みしめていたわけだけど。

わたしたちは、ゆうきくんが通りかかったのが遅かったということとを、完全に失念してしまっていた。

ホームルーム開始の五分前に鳴らされる予鈴が、微かに聞こえてくる。

「あら、予鈴の音ですわ」

「きや〜〜〜！ 遅刻しちゃう！ ゆりかごさん、走らないとっ！」

「スカートのプリーツは乱さないように……なんて言っていられませんわね。では、全速力ですわ！」

「うん！ 何年ぶりだろ……」

「先生方に見つかると困りますし、正門が見えたら走るのは諦めなくてはいいけませんわね。ですから途中までは、死に物狂いで走りますわよ！」

「うっ、走るの苦手なのに……。もしわたしが転んだら、先に行つてね！」

「なにを言うのですか。息吹さんひとり残して、先に行けるわけが

ないじゃないですか！」

「うっ、ゆりかごさあ〜ん！」

全力で走りながらも、こんな友情ごっこなんてやっているわたしたち。意外と余裕があつたのかもしれない。

それから、ゆりかごさんの作戦は続いた。

週末は学校がないから実行できないけど、平日には必ず作戦を遂行することになった。

さらには、朝だけじゃなく帰り道でもあの曲がり角に立って、ゆうきくんが通るのを待った。

わたしもゆりかごさんも、部活動はしていない。

ただ、藤星女学園は授業の終わる時間も遅いから、すでにゆうきくんが通り過ぎたあとということも多いみたいで、放課後は毎回会えるわけではなかった。

……もちろん、話しかける勇気がないわたしだから、「会う」「じやなくて、「見かける」ただけだけど。

それでもわたしは、ただ見つめているだけで幸せな気持ちになれた。

ゆりかごさんは、じれったいと思っているみたいだけど、わたしは今のままでも全然構わなかった。

ゆうきくんのほうも、どうやら部活動はやっていないらしく、だいたい授業が終わる時間から少し経った頃、あの曲がり角を通るようだ。

曲がり角までの距離は、わたしたちの藤星女学園からのほうが近いので、急いで学園を出れば間に合うことも多い。

今日はゆうきくんに会えるかな、なんて考えながらいつもの場所へ向かうのが、とても楽しくなっていた。

もっとも毎朝、ほぼ確実に会っている、というか見かけているわ

けだけど。

そんなある日。

いつもどおり、ゆうきくんに話しかけることもできず、若干沈みながら学園に着いたところで、ゆりかごさんからこう言われた。

「今日の放課後は新しい作戦がありますから、楽しみにしていってくださいね」

「ふえっ？」

わたしが思わずだらしなく口をぽかーんと開けて、わけのわからない返事をしてしまったのも、不可抗力ってものだよな？

新しい作戦って、なんだろう？

今日は一日中、そのことが気になってしまい、授業なんてまったく頭に入らなかった。

ゆりかごさんに尋ねても、「ふふふ、ひ・み・つ」ですわ」なんて言って、答えてくれないし。

そして五時間目の授業が終わると、ゆりかごさんは素早くわたしの手を取って走り出した。わたしは呆然としつつも、慌てて反対の手でカバンをつかみ、彼女に引っ張られながら教室をあとにする。

ちなみに藤星女学園では、掃除は業者さんの仕事になっているため、わたしたちは自分で教室などの掃除をする必要はない。

そっか、他の学校だと生徒に掃除させるのが普通なんだよね。だ

からゆうきくんの帰る時間に、わたしたちが帰る時間を合わせられたんだ。

とかなんとか考えながら、ゆりかごさんに手を引つ張られたわたしは、いつもの曲がり角へと到着した。

ドキドキドキ。

胸を高鳴らせながら、ゆうきくんが通りかかるのを待つ。

今日はなぜか、ゆりかごさんも黙ったまま。

普段ならうるさいくらいに話しかけてくれるのに。ついつい、そんな失礼なことまで考えてしまう。

ゆりかごさんはただ黙って、わたしの右手をぎゅっと握っている。

少し経つと、道の向こうに待望のゆうきくんの姿が見えてきた。お父さんの面影がなんとなく感じられ、安らかな気持ちになると、ゆりかごさんが耳もとでささやきかけてきた。

「これからわたくしが声をかけますわ。とりあえずそのまま、黙って横にいてくださいませ」

「えっ？」

戸惑うわたしの頭に、ちょっと久しぶりの「あれ」が浮かび上がる。

『ゆりかごさんを止める』

『ゆりかごさんに任せる』

えーっと……。

考えるまでもなく、決まっているようなものだけだ。

でも、こんなタイミングで選択肢が「視えた」わけだから、少し慎重になるべきなのかな……？

わたしが考え込むような素振りを見せると、唐突にゆりかごさんが、ぎゅっとわたしの手を握ったまま顔を前方に回り込ませる。そして責めるような瞳を向けながら、こう言い放った。

「もうっ！ 考える必要なんてありませんでしょう？」

「う……うん……」

わたしは頭の中の選択肢を振り払い、ゆりかごさんの言葉に従った。

「あの、すみません」

「はい？」

ゆりかごさんは躊躇することなく、ゆうきくに声をかける。

さっきまで握っていたわたしの手は離し、代わりに彼女は両手になにやら紙のようなものを持っていた。

それをゆうきくに差し出しながら、彼女は声をかけたのだ。

「お手数ですが、アンケートにご協力していただけませんか？」

なるほど、そういうことか。

ここはわたしも、話を合わせておくべきだね。

「ぜひ、お願いします」

ゆりかさんの持つアンケート用紙に目を落とし、続けてかけられた声の主、つまりわたしに視線を向けてくるゆうきくん。

うわぁっ！ こんな近くで、ゆうきくんと見つめ合ってる！

飛び上がりそうな気持ちをどうにか抑えながら、わたしは成り行きを見守る。

ゆりかさんの言う新しい作戦の内容を聞いていないわけだから、余計なことはしないほうがいいだろう。

「えっと、ぼくでいいの？ ……うん、まあ、いいけど……」

ちょっと戸惑い気味ではあるけど、肯定の言葉をつぶやいたゆうきくんの手を、ゆりかさんはすっとつかんで引く張る。

「では、すぐその公園まで、ご一緒してくださいませ。さすがにここでは、人通りの邪魔になってしまいますし」

「あつ、うん、そうだね」

こうしてわたしたちは、見事にゆうきくんを連れ出すことに成功した。

公園に入ると、ゆりかさんはゆうきくんをベンチに座らせ、素早く下敷きの上に乗せたアンケート用紙とシャープペンを手渡す。続けて彼女は、わたしをその隣に座らせた。

「アンケート用紙の上から順番にお答えください。不明点はそちらの息吹さんにお尋ねくださいね」

ちょ……ちょっと、わたし、尋ねられてもわからないよ？

思わずそう叫んでしまいそうなたしを、ゆりかごさんが視線で制する。

「うん」

ゆうきくんは素直に言うことを聞いて、アンケート用紙に答えを記入し始めた。

ちょっと、素直すぎるんじゃないかな？

もしかしたら、騙されやすい性格なのかも？

なんて、自分が今、騙している張本人だというのを棚に上げて、そんなことを考える。

というか、わたし、ゆうきくんの隣に座ってるんだ……。

ドキドキドキ。

鼓動が高鳴る。

そんなわたしの横で、アンケートに答えながらも、ゆうきくんはゆりかごさんと会話を交わしていた。

「恋愛についてのレポートなのですが、女子校なので、男性の考え方がどうしてもわからなくて」

「そうなんだ。でもぼくも、そういうのはよくわからないんだけど

……」

「あくまでも多くのサンプルのうちのひとり、とお考えください」

少しだけ、いいな、わたしもお話したいな、と思ったりもしたけど、ここはゆりかごさんに任せるしかない。

わたしは黙ったまま、ゆうきくんがペンを走らせる音を聞いていた。

書かれた答えをのぞき込みたい衝動に駆られてはいたけど、それは悪いかな、っていうのと、近づきすぎるのは恥ずかしい、っていうのがあって、わたしはゆうきくんの横でうつむいていた。

と、静かな公園の片隅に、不意に音楽が鳴り響く。

この音、確かゆりかごさんのケータイの着信音だったはず……。

ゆりかごさんはケータイを取り出すと、ベンチから少し離れた場所です話し始める。

「……はい、はい、え、ですが……。はあ、仕方ありませんわね。わかりましたわ」

そう言って、彼女は電話を切った。

「すみません。わたくし、一旦学校に戻らなければいけなくなりましたの。書き終わったアンケート用紙は、息吹さんにお渡ししておいてください。用事が済みましたらすぐに戻ってきますので、アンケートを書き終えたら、ここですばらくお待ちいただけますか？」

「うん、わかった。行ってらっしゃい」

ゆりかごさんの言葉に、ゆうきくんは優しく答える。

対するゆりかごさんも、ふふふ、と優しい微笑みを返していた。

……それでは、頑張ってくださいませ。

去り際、そつとわたしの耳もとに顔を寄せ、ゆりかごさんはそうささやいた。

「お友達、戻ってこないね」

「はい、そうですね……」

人通りも少ない公園のベンチで横並びに座るわたしを気遣ってか、ゆうきくんは遠慮がちにはあるものの声をかけてくれるのだけど、わたしが返事をする、そこでどうしても会話が止まってしまう。

ゆうきくんは、どうやら自分から積極的に話しかけるタイプの人ではなさそうだった。

でもそれ以上に、わたし自身が拒絶のオーラを放ってしまったているのだろう。

そりゃあわたしだって、できればゆうきくんと、ちゃんと話したい。

だけど、恥ずかしくて、どうしてもダメなのだ。

思えば、まだ本当の両親のもとで生活していた初等部の頃からずっと、女子校しか経験していないわたし。

わたしはひとりっ子だし、親友でよく家に遊びに行くゆりかごさんもひとりっ子だ。

もちろん、昔はお父さんがいたし、今は幸人さんがいる。ゆりかごさんのお父さんにも会ったことがある。

だけど、お父さんくらいの年齢の男性は、やっぱり同じ年代の男の子とはまったく違う。

考えてみたらわたしって、近い年齢の男性とお話したことすら、今までの人生ではほとんどなかった。

なにを話したらいいのか、どんな顔をすればいいのか、まったくわからない。

ただ向き合うだけでも、わたしの頬は一瞬で真っ赤に染まり、堪えきれずにつつむいてしまう。

……ふえくん、会話が、続かないよぉ。
ぐしゃっ。

わたしの手もとで、不意に音が鳴る。

「あっ！」

その音の発生源は、すべて答え終え、ついさっきゆうきくんが手渡してくれた、アンケート用紙だった。

「ふう、危なかった……」

思わずぎゅっと握り潰してしまうところだった。

「どうしたの？」

「い……いえ、なんでもありません！」

すぐそばから心地よい響きの声が投げかけられたものだから、わたしは慌てて、またしても深くうつむいてしまった。

はう、やっぱりわたしって、ダメだ……。

落とした視線の先には、握りつぶしそうになったアンケート用紙。

そうだ。アンケートの結果なら、話題になるかも。

今さらながらにそう考えたわたしは、くしゃくしゃになりかけた

アンケート用紙のシワを伸ばしつつ、裏返しになっていたそれを見直し、
に向け直す。

「姫宮優季……。ゆうきって、こういう字を書くんですね」

つぶやいてから、はっと口をつぐむ。

わたしは以前から優季くんの名前を知っていて、どんな漢字なのかを想像していた。

でも優季くんにしてみれば、わたしは今日初めて会ったばかりの女の子としか認識していないはずなのに。

おそろおそろ顔を上げて、ちらりと優季くんの表情をうかがってみたけど、どうやら優季くんは、とくにそのことを気にしたりはしていない様子。

「あはは。うん、女の子みたいな名前で、おかしいでしょ？ 名字も姫宮なんてのだから、余計に女の子っぽく思われちゃうんだよね」

と、少し自虐気味に笑った。

「そ、そんなことないです！ 綺麗で素敵な名前だと思います！」

わたしは素直に、そう答えていた。

優季くんの目を、見つめながら。

その彼の瞳は、ほんとに目と鼻の先にあって……。

はうつ！

わたしが我に返って、恥ずかしいという感覚を取り戻すよりも早く、優季くんはわたしに微笑みかけてくれた。

「ありがとう」

優季くんの吐息すら感じられる、こんな至近距離で。
わたしはなんだか、ぼーっと……というか、とろろんとした目になっってしまう。

「えーっと、キミは……」

と、優季くんが一瞬考え込む素振りを見せる。

あつ、そうだ！ 名乗っていなかったから、優季くんはわたしの名前がわからないんだ！

「あの、わたしは——」

「息吹さん、でいいのかな？」

ドキン！

優しい声で名前を呼ばれると、それだけで心臓が飛び出しそうなほどだった。

わたしの名前、知ってくれてた！

「は、はい……」

浮かれ気分を抑え、どうにかこうにか、ひと言だけ答える。

「さっき、お友達がそう呼んでたから」

あ……なんだ、そっか。それもそうだよな。知ってるはず、ないもんね。

浮かれていた気持ちが、一瞬で冷めていった。
だけど——。

「いつもあの曲がり角で、さっきのお友達と待ち合わせしてるよね？ 息吹さんって名前も、そこで聞いた気がする」

うわっ、覚えててくれたんだ！

なんだかもう、踊り出してしまいそうな気分。きつと顔も、にへらへらとだらしく緩みまくっていたに違いない。

「はい、そうです！ わたし、神奈息吹っていいいます。よろしくお願いします！」

なにをよろしくお願いするんだか、と自分で自分にツツコミを入りたいところだけど。

でもこのときのわたしは、もう完全に舞い上がっていた。

そりやあもう、空だって飛べるかもってくらいに。

目の前の優季くんが温かな笑顔を向けてくれているというのもあって、まさにわたしは天にも昇る勢いだった。

「うん、よろしく。ふたりは藤星女学園の生徒なんだよね？」

「は、はい！」

「そっか、お嬢様なんだね」

「いえ、わたしはべつにそんな……」

次々と繰り出される優季くんの質問攻めに、わたしは必死になつて答える。

「藤星の制服って、すごくおしとやかな雰囲気だよね」

「ええ、そうですね、わたしも気に入ってるんです！」

「そうなんだ。でも、着ている人たちの人柄も出てるのかもね。しつとりとした優雅なイメージがあつて、うちの生徒はみんな、高嶺

の花って思ってるよ」

「そ……そんなことないです。結構普通ですよ。そりゃあ、スカートのプリーツは乱さないように歩くとか、イメージを大切にしている部分があるのは確かですけど……」

若干たどたどしくはあったものの、わたしは優季くんと、こんなふうにいるいろいろとお話することができた。

舞い上がってはいたけど、それが逆によかったのかもしれないな。さっきまでのわたしだったら、きつとすぐに恥ずかしくなっ、うつぶいてしまっていただろうし。

しばらく、時間を忘れてお喋りを楽しんでいると、優季くんがなポツリとつぶやいた。

「うーん、そろそろ暗くなるね」

「あ……ほんとですね。ゆりかごさん、戻ってこないな……」

夕陽もすっかり沈み、もうそろそろ暗くなり始める時間になっていた。

「なにか、急な用事でもできたのかな？」

「どうかな……」

そう答えながら、わたしはきつと、ゆりかごさんは最初から戻ってこないつもりだったのだろうと考えていた。

だからこそ、頑張ってくださいませ、なんて言い残したに違いない。

さっきの電話だって、クラスメイトの誰かにあらかじめお願いして、適当なタイミングで鳴らしてもらった嘘の電話だった可能性が高いような気がする。

ともかく、ゆりかごさんが帰ってこないのなら、そろそろ潮時だろう。

わたしの住む家はこの公園から歩いても五分とかからないし、優季くんの家がどの辺りなのかは知らないけど、徒歩で学校に通っているわけだから、それほど遠くはないと思う。

でも、さすがにこれ以上引き止めるわけにはいかないよね。

「えっと、そろそろ帰りましょうか」

わたしはそう提案する。

「ん、そうだね。お友達には悪いけど……。よろしく伝えておいてね」

優季くんも頷き、ベンチから立ち上がった。

「あつ、あの……。アンケート、ありがとうございました！」

ゆりかごさんが仕組んだ嘘のアンケートではあっても、こうやって時間を割いてくれたのだからと、きちんとお礼の気持ちを伝えておく。

もちろん本音としては、こんなにお話してくれてありがとう、という意味も込めていたのだけど。

「こちらこそ、いろいろとお話できて楽しかったよ」

優季くんがまぶしいほどの笑顔を浮かべると、ふわっとそよ風が彼の髪の毛を揺らした。

と、頭の中に浮かび上がる選択肢。

『それじゃあ、さようなら。手を振って別れる』
『ここは思いきって……』

うわっ！

思いきって、なに？

無意識に顔を赤らめてしまったけど。
でも、ここはやっぱり……。

× 『それじゃあ、さようなら。手を振って別れる』

○ 『ここは思いきって……』

わたしは意を決して、背を向けようとしていた優季くんに声をかけた。

「あのっ！ またお会いしていただけますか？」

「え？ ……うん、もちろん！」

笑顔で、そう答えてもらえた。

涼しくなりつつある夕風を受けながらも、わたしの心はぽかぽかと温まっていくのだった。

わたしはケータイなんか持っていないし、どうやら優季くんも持っていないようで、連絡先の交換まではできなかったけど。

でも確実に一歩、優季くんに近づくことができた瞬間だった。

お母さんが、笑っている。
わたしのほうを見て、笑っている。

「この子にも、将来は恋人ができたりするんでしょうね」

ちゃんちゃんと、わたしの鼻の頭を人差し指で軽くつつきながら、
「ね」と、笑いかけるお母さん。

「あははは、そうだね」

お父さんも、笑っていた。

忙しくて家にいないことも多かったけど、いつも優しくわたしを
包み込んでくれる。

お母さんの匂い。

お父さんの匂い。

ふたりの匂いに包まれて、わたしも満面の笑みをこぼしていた。

「あなた、娘はやらん！ とか言って怒鳴ったりしないでください
よ？」

「うーん、約束はできないかな……」

「もう、あなただったら」

お母さんは、うふふ、と、笑い声を空気に乗せて響かせる。

手入れの行き届いた綺麗なリビングルームは、幸せいっぱい
の空気で隅々まで満たされていた。

お父さんとお母さんが仲よくお喋りしているのを、笑顔で見つめるわたし。

わたしはふたりの笑顔が、とっても大好きだった。

今では記憶の中でしか見ることのできない、ふたりの笑顔が。本当に本当に、大好きだった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153y/>

イノセント・アライブ ～命の選択と荒ぶる息吹～

2011年10月29日15時21分発行